

#MeToo 誰もが声を上げられる 社会をつくろう

伊藤 和子

2018年のノーベル平和賞は、コンゴ、イラクの紛争下での性暴力被害の根絶のために献身的な活動を続けてきた男性医師と女性の活動家が受賞した。思えばこの一年は、世界中に「性暴力を許さない」の聲が共鳴した年だった。

これまで幾多の女性たちが性暴力被害に遭いながら、沈黙し泣き寝入りをさせられてきた。性暴力やセクシュアル・ハラスメントの加害者の多くが社会やコミュニティで実権を握り、真実の声を上げても大きな力でつぶされ、性被害について語ることは恥ずかしいこととされたり、被害者の落ち度を責める社会の風潮すらあった。そうした壁を「みんなで」連帯して声を上げることで乗り越え、社会環境の変化を生み出したのが#MeToo運動だ。性暴力が明らかとなり加害者が地位を追われる事態が続出、性被害に関する法整備が前進した国もある。

日本でも変化の兆しはある。ジャーナリストの伊藤詩織氏が実名でレイプ被害を訴えて会見や書籍出版をし、性暴力被害者の救済が十分でない日本の現状に問題提起をしたことは多くの女性の心を揺さぶり励ました。財務省セクハラ事件のときには、メディアや企業で女性たちが声を上げることにつながった。

「セクハラ罪はない」と聞き直る財務相や、性加害を疑われた法律家の米連邦最高裁判事推薦など、ハラスメントに鈍感な権力者たちによる古色蒼然たる振る舞いに無力感を抱くこともある。2017年には性犯罪刑法が改正されたが、被害者の声を反映した処罰の実現までの道のりは遠く、不当な事例は後を絶たない。しかし、女性たちが勇気を出して声を上げ、体験を共有し、連帯が広がれば、何かが変わるはずだという大きな確信が生まれたことは間違いない。

鍵を握るのは「声を上げること」、そして「共感すること」。日本に生きる女性には今も、声を上げれば叩かれる、声を上げにくいという壁が立ちしだかる。だからこそ、勇気を出して声を上げる被害者をひとりにせず、共感し応援する輪を大きくして、誰もが声を上げられる社会を一緒につくっていききたい。



PROFILE

いとうかずこ：弁護士。国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウ事務局長。2004年、ニューヨーク大学ロースクール客員研究員を経て、2006年、日本を拠点とする国際人権 NGO ヒューマンライツ・ナウの立ち上げに参加。以後事務局長として国内外の人権問題の解決を求め活動。同時に弁護士として、セクハラ、DV、AV 出演強要被害等の女性の権利擁護のために活動している。